

流通経済大学所蔵 祭魚洞文庫『百人一首 全』

和田 律子

はじめに

本稿は、流通経済大学所蔵祭魚洞文庫『百人一首 全』（以下、本資料）の紹介を目的とするものである。

本資料は、表紙に『百人一首 全』との題箋が付された版本である。これまで紹介されたことはなく、ほとんど注目されてもこなかったようである。

本資料は、「百人一首」と題されているが、内容は百人一首作者の絵（いわゆる歌仙絵）のみが百人一首の番号順に載せられているものである。現在、一般的には、百人一首絵とは、少なくとも百人一首の「歌」と歌仙絵とが掲載されているものを指し、その上で他の内容も付加されているものもふくめ、「百人一首絵」と称している。^{注1}百人一首絵を上述のように解釈したとき、本学所蔵の『百人一首 全』には絵しかないため、一般的に「百人一首絵」の定義からは逸れるものといえよう。

以前、本学図書館元職員高橋柏氏（故人）から、本資料について、近世期に非常に多くの種類が出版された往来物の一種で、上流階級の子女の手習い用のものであるとの説明を受けたことがある。もしかすると、いわゆる異種百人一首の往来物のなかに、本資料のような絵だけの「百人一首」が存在するのかもしれない。しかし、百人一首および百人一首絵研究の専門外の稿者による粗い調査であるので、詳細は不明であるが、管見に入った限りでは、そのような、絵だけの「百人一首」はみつかっていない。

本資料は、詳細は後述するが、近世後期の版本で大本である。表紙は薄茶色紙表紙で、全体に二重格子に梅が枝が雲母刷りで配され、中央に「百人一首 全 鳥井清長画」の墨書題箋が付される。墨書はこの題箋のみで、本紙には奥書その他一切ない。そのため、墨書の筆者については不明であるが、題箋は後に貼付された可能性も十分にある。文字は江戸後期筆であろうと思われる。本紙は、半丁に百人一首作者一人の絵が刷られる。すべての絵が半丁の下半分に置かれている。絵は人物のみで、衣裳の文様・御簾や畳の縁などが丁寧に描写されている。女性の十二単や裳の描写も詳細で、すべて淡彩で刷られている。

以上のような内容から見て、良質の版本であり、本資料は作成当初から今日にいたるまで持ち主に大切に扱われてきたものであることが窺われる。不明な点も多いがここに資料を紹介し、大方のご教示を賜りたく考える次第である。

流通経済大学図書館所蔵祭魚洞文庫について

祭魚洞文庫は、渋沢敬三旧蔵の文庫である。渋沢敬三は、渋沢栄一の孫、日本銀行総裁、大蔵大臣等を歴任し、日本の経済界を代表する人物のひとりである。と同時に、文化事業にも強い関心を持ち、とくに、民俗学

の発展の功労者といわれている。洪沢敬三は、その書齋を「祭魚洞書屋」と命名し、主として民俗学や常民文化に関する書物資料の収集を続けた。

その蔵書の一部が、現在、本学の所蔵に帰している。経緯については、すでに、元学長島田孝一氏・本学元職員高木征三氏による文章があるが、発表後すでに三十年以上が経過していることもあり、一般の目に触れる機会も少ない。ここに、両氏の解説を一部再掲することで、当文庫の紹介に替えたい。

流通経済大学所蔵『祭魚洞文庫目録』(注2)序

このたび本学に関係の深い日本通運株式会社が、同社の創立三十五周年を記念する事業の一環として、その所蔵にかかる書冊二一・四四四点を、目録の印刷費とともに、本学に寄付された。洵に悦びに堪えない。それらの書冊は、すべて故洪沢敬三氏が高邁な見識に基き、永年にわたり蒐集せられた広汎な民族史料であつて、本学は同氏に因み、これを祭魚洞文庫と称し、永く図書館に架蔵して研究者の便に供し、かつは日本通運株式会社の厚意に報い、かつは故洪沢敬三氏の遺旨に応えることにしたい。大方の諸賢幸にこれを諒とされよ。

昭和四十七年十一月六日 流通経済大学 学長 島田孝一

「祭魚洞文庫について」(注3)

I 祭魚洞文庫とは

祭魚洞文庫は洪沢敬三氏（1896-1963）旧蔵の図書、文献をいう。洪沢敬三氏は洪沢栄一（青淵）翁の孫にあたり、戦後日本銀行総裁・大蔵大臣として活躍されたことはよく知られている。その書齋を祭魚洞書屋

と名づけられておられた。祭魚洞文庫の名称はこれに由来している。洪沢敬三氏は実業家・政治家としての業績のほかには民族学者・常民文化研究者としても知られ、日本民族学会・常民文化研究所・アチックミュージアムなどを創設運営し、この分野における研究・育成・資料文献の収集などに多彩な活躍をされた。

日本通運株式会社は先年この祭魚洞文庫を洪沢家から譲り受け、現在この文庫は流通経済大学図書館に保管されている。(中略) 満二年を要した祭魚洞文庫の整理が最近一段落となったのを機とし、以下にその内容を概略を紹介する。

II 冊数と収集範囲の特質

本学で所蔵している祭魚洞文庫の総冊数は約二万冊である。この数字は整理にあたって一冊ごとに貼付した蔵書票の数から割り出したものであり、したがって製本されていない逐次刊行物(雑誌など)・パンフレット・抜刷などの小冊子を各一冊として数えた結果である。この中には同一または隣接した主題、さらには関連を欠く主題の図書資料を保存の便宜上合綴して一冊としたものがおびただしい数にのぼっている。実質的には二万四〇〇〇〜五〇〇〇冊の蔵書数と考えられる。

収集はいうまでもなく洪沢敬三氏によって行なわれたのであるが、その経路を蔵書印などから推測すると、青淵翁収集の青淵文庫、岩田準一氏、鹿野忠雄博士・鈴木行三氏などの集めた図書・文献に洪沢敬三氏自身の集書が積み重ねられたものようである。なお、青淵文庫には織田完之氏の旧蔵書多数が入っている。(以下、略)

〔『流通経済論集』vol.6 No.2 p.129〕

両氏の紹介にあるとおり、「祭魚洞文庫」は、洪沢敬三蔵書の一部を、日本通運株式会社が譲り受け、そ

の後、流通経済大学に寄付されたものである。当時の流通経済大学図書館職員高木征三氏を中心に目録作成が行なわれ、昭和四十八年に冊子目録が発行者流通経済大学編纂者流通経済大学図書館の私家版として刊行された。

現在、図書館では目録を新たにデータ化する計画も進められつつあると聞いているが、高木氏の解説にもあるとおり、蔵書数が膨大で小冊子や合綴本も多いため、内容の確認作業にも多大な手間と時間が必要となり、いまだ、作業途上にあるという。

蔵書内容は、高木氏の解説によると、和書が中心で、その主流となる分野は以下の三点であるという。1、地方史に重点を置いた日本史と蝦夷・沖縄・南西諸島などをふくむ日本地誌 2、農学に重点を置いた明治初期の産業技術史 3、日本民俗学・文化人類学・考古学に関する文献。以上である。

本稿では、祭魚洞文庫の一点である『百人一首 全』を紹介するが、文学関係の蔵書は、高木氏の分類による主流からはずれているためか、これまでほとんど注目されてこなかった。^(注4)しかし、目録によれば、本資料以外にも江戸時代の版本を中心とした国文学資料が多く含まれているため、今後詳しい調査を行なう価値があるものと考えられる。祭魚洞文庫と祭魚洞文庫における国文学資料への注目と再認識とを願いつつ、ここに紹介することにする。

祭魚洞文庫『百人一首 全』と民法学者穂積重遠

『百人一首 全』には「祭魚洞文庫」のラベルが付されているため、洪沢敬三旧蔵と考えて良いと思われるが、洪沢家の系図をたどると百人一首蒐集家としても知られている東京大学教授民法学者穂積重遠に行き着く。

穂積重遠は、日本近代民法の起草者のひとりである穂積陳重の長男で、今の天皇の皇太子時代の東宮大夫兼東宮侍従長でもあった。洪沢敬三がどのような経路で『百人一首 全』を入手したかについては不明としか言いようがないが、ひとつの可能性として、穂積重遠の介在も考え得るのではないか。なぜならば、穂積重遠の母は洪沢栄一の長女歌子で、洪沢栄一は自分の孫で歌子の甥にあたる敬三の教育を陳重歌子夫妻に託したという。歌子を母とする重遠と敬三はいとこ同士でもあり、親交深い関係にあったのである。^(注5)

穂積重遠の末娘で中世和歌研究者鶴見大学名誉教授の岩佐美代子氏は、重遠の百人一首蒐集の思い出を以下のように記している。

(三月の大空襲 その時には、父と母と私と、それから幸いなことに、兄がたまたま帰ってきてたんです。兄がいなかったら心細かったけれどね。書齋の続きの古い書庫が、火に包まれていたんだけど、どこからか知らない人が四人も五人も来て下さって、「穂積先生の書庫を焼くな」って、水を掛けて下さったんです。だから私、一晩中、井戸のポンプを押し続けに押ししました。それで、祖父(稿者注 民法学者穂積陳重)のイギリスから持ち帰った古い本は助かりました。(中略)

(四月十三日の空襲 父の集めた百人一首のもじりの本の蒐集を、全部焼いたのは可哀相でした。それだけは本当に、父もがっくりしていました。あと何も言いませんでしたもの。それは異種百人一首というので、江戸時代に面白い板本が、いっぱい出てるのね。父はそういうものが、好きでしたから。今、東洋大学と跡見学園女子大学で集めていらして、家にあつたのと同じもの、ほとんど全部あるんだらうと思いますけど、それに目をつけて集め始めたのは、父は早いほうでした。

(注6) 『岩佐美代子の眼―古典はこんなにおもしろい』五六頁〜五九頁)

穂積重遠の百人一首蒐集は有名で、目録が『小倉百人一首類書目録』（独律書屋 大正十二年十二月）、「百人一首物研究―蒐集目録抜萃―」（新潮社 日本文学講座19 昭和三年）等として刊行されていることから、本格的なものであったことがわかる。百人一首研究のうえからも注目される人物であった。

右のようなことを勘案すると、渋沢敬三が親しい関係にあつた穂積重遠の百人一首蒐集に触発されて、あるいは手ほどきを受けて、あるいは重遠の厚意によって、本資料を入手した可能性も考えられないことではない。法学部開設十周年を迎えた本学に、近代民法の先駆者のひとりである穂積重遠が、このような形で関わっていたとしたら、まことに喜ばしいことである。

百人一首絵について

百人一首絵については、先行研究も多く、最近研究はとくにさかんになりつつある。^(注7)本資料紹介にあたり、先行研究に導かれ、百人一首絵について以下に概観し、本資料の位置づけの手がかりとしたい。

百人一首の「絵」というと、かるたの読み札に描かれている人物像を思い浮かべる人が多いであろう。しかし、かるた絵が始まったのは、江戸時代に入ってからで、歴史は比較的新しい。百人一首絵の源流は、鎌倉時代に成立した佐竹本三十六歌仙絵のような歌仙絵や時代不同歌合絵に遡る。時代不同歌合絵は現在完本がないが、三十六歌仙絵は多くの伝本が残っている。それらの作品は、歌仙絵と歌人の代表歌と略伝が付されるのが一般的である。すなわち、絵と歌がセットになっているのが一般的であったということである。

こうした歌仙絵は、鎌倉時代後期あたりから流行しはじめたと考えられ、伝藤原俊成筆による歌仙絵もその頃までに描かれたといわれている。このような状況の中で、百人一首絵は、鎌倉時代末から室町時代初め頃に、

藤原定家選百人一首をもとにして成立したのであろうというのが、現在の研究者の見解である。百人一首が絵をともなっていたものとして伝承されてきたこともあり、百人一首と百人一首絵の關係について、百人一首絵の成立は百人一首成立とほぼ同時と見る説が多い。吉海直人氏は、「こういつた伝承は、鎌倉期以降の三十六歌仙絵の流行の中で醸成されたものであろう。おそらくその影響を受けて、近世初期の歌仙絵入百人一首版本が誕生したと推測したい^(注8)」とされる。

江戸時代の百人一首絵は、森暢氏の分類を中心^(注9)にまとめると、代表的なものは以下の三系統に分類される。

1 東洋文庫蔵角倉素庵（一五七一―一六三二 了以の長男）筆版本（以下、「素庵本」）

元和・寛文前半頃（十七世紀前半）成立の版本。歌と歌仙絵。

以後の百人一首歌仙絵の構図の基本になった。

（島津忠夫氏訳注『新版百人一首』（角川文庫）に絵が掲載されている。）

2 菱川師宣絵入注釈「百人一首像讚抄」（延宝六年（一六七八年）版本）（以下、「像讚抄」）

細川幽齋の注釈に菱川師宣の歌仙絵をふくむ挿絵を付した絵入注釈書。

もつとも広く流布した版本の百人一首絵の系統といわれる。

基本的には素庵本の絵に似るが、異なる部分も見られる。

（刊本に、版本文庫9『百人一首像讚抄』上・中・下昭和五十年 国書刊行会がある。）

3 長谷川光信筆本（書名不明 「光信本」と称される 享保十二年（一七二七年）版本）（以下、「光信本」）

女性向の往来物

(伝本は、花月文庫蔵本の一本のみ。)

なお、江戸時代半ば以降になると、「光琳かるた」などが現われ、百人一首絵や百人一首かるた絵は大流行し、内容も体裁も多種多様なかたちになっていくが、ほとんどが右の三本のいずれかの影響を受けたものであることも、先行研究により確認されていることも述べておきたい。

祭魚洞文庫『百人一首 全』について

はじめに書誌を記しておく。

書誌

蔵書目録番号 『流通経済大学蔵 祭魚洞文庫目録』 721・817

袋綴(四つ目) 白絹糸綴(新しい 改装か) 一冊 淡彩刷 版本 縦二十七・五cm 横二十一・一cm

奥付・刊記・柱・版元等の記載なし

表紙 薄茶色鳥の子紙表紙。雲母刷で二重格子梅枝紋

題箋 縦十九・〇cm 横四・九cm 鳥の子紙金箔散

中央に題箋「百人一首 全 鳥井清長画」(墨書)

見返し 楮紙厚様

一オ 右上に「祭魚洞文庫16602」のラベル

一オ 下に「清長百人一首」(墨書 題箋と同筆)の付箋(楮紙薄様 縦六・四cm 横三・三cm)

本紙 墨付四十九丁 (十三丁目の二丁欠落)

楮紙厚様 全丁同質紙

各丁表・裏に、百人一首絵が百人一首の順序で刷られている。

本紙下半分に歌仙絵のみ。歌なし。

各人物像には、本紙端に人名が刷られた付箋(楮紙薄様 縦六cm×横二・三cm前後)あり。

状態 上部虫損あり。絵が描かれている下半分はほとんど虫損なし。

全体としては、保存状態は良好である。

一ウ・二オ・二ウの三人は(天智天皇・持統天皇・柿本人麿)は、図様をていねいに切り取ったものを貼付してある。紙質は本紙と同紙。

大本であること、表紙の雲母刷の状態が良好であること、文様は二重格子のあいだに梅の花をつけた枝がからんでいる様子を描いたもので、表紙全体に刷られていること、本紙の歌仙絵は淡彩刷で、衣裳の文様などがきわめて丹念詳細に描かれていること、などを総合すると、所蔵者が偲ばれる良質の版本であると考えられる。本資料は、既述のとおり「百人一首」とは言いながら、じつは、百人一首の歌は記されていない。百人一首作者の姿絵、いわゆる歌仙絵が歌の順序に従って本紙半丁の下半分に淡彩を付して刷られているものである。百人一首研究の分類では、百人一首絵に分類されるものであるが、一般的には、百人一首絵に分類されているものには百人一首「歌」が併せて書かれている。まったくの絵のみというものは、管見に入った限りでは見当たらないようである。たとえば、湯澤賢之助氏の労作『近世出版百人一首書目集成』(注7参照)は、「『百人一首』の範疇に入るもの一七二〇余を集成し」たもので、書誌・編者などの情報とともに内容も整理して示

されている。粗い調査ではあるが、同書を檢したところでは、歌仙絵のみの百人一首という記載はみあたらない。

また、藤田洋治氏^(注⑩)は、「往来物の中では従来ほとんど注目されることのなかった版本『百人一首』を採り上げ、(中略)主に女子を対象とした教養の内容が近世期という時代の中でどのように変化していったかを考察する」にあたり、絵入百人一首を以下のように定義している。すなわち、「ここでいう『絵入百人一首』版本とは、写本や注釈書、書道用手本を除いた、江戸時代に出版された『百人一首の歌・作者名・作者絵』を載せたものをいう。一応書道の手本の体裁を取りながら、歌人の肖像画を入れ、上段に小さな作品や教訓などを掲載している一方で、百人一首の歌に関して注釈や訳文を付さないのが普通である」という説明である。とすれば、本資料は、「絵入百人一首」の定義からはずれることになる。

題箋には「鳥井清長画」とある。奥書もなく無刊記のため、その当否も不明である。狭い範囲の調査ではあるが、版本百人一首絵の絵師を調査した結果、鳥居清長画の版本は該当するものがみつからない。湯澤氏の分類によれば、画工名が逐一記されているが、「芝居百人一首(『古今四場居百人一首』元禄六年一六九三年)」「異種百人一首の一種」(同書一〇〇頁)に「鳥居清信画」とあるのが唯一の鳥居派の画工で、清長は見当たらない。なお、「芝居百人一首」は、内題に「元禄六年」(一六九三年)とあり、この場合の「清信」は、享保十四年(一七二九)に逝去した初代鳥居清信であると考えられる。清長は、鳥居派四代目を継ぎ、清長様式といわれる美人画で知られる画家で、文化十二年(二八一五)に五十九歳で逝去している。『百人一首 全』が清長の画になるものとすれば、十八世紀後半から十九世紀はじめすなわち文化文政頃の版本ということになる。

祭魚洞文庫『百人一首 全』の特徴

先行研究によれば、百人一首絵の図様はしばしば問題にされてきた。島津忠夫氏は、柿本人麿像が佐竹本三十六歌仙絵以来の独特の図様を伝統的に継承してきていることなどを例にあげ、百人一首絵の図様には「素庵本」やあるいはそれ以前から継承されてきたひとつの固有の型があることを指摘された^{〔注1〕}。また、吉海直人氏は、持統天皇の図様のバリエーションが大変多いことを指摘されている^{〔注2〕}。その他先行研究により、崇徳院の座る畳が纏縹縁（天皇用）高麗縁（臣下用）か、または畳なしかという問題や、祐子内親王家紀伊など一部の女性歌人が女房でありながら内親王のように扱われている問題などについての指摘もなされている。基本的には素庵本等を踏襲している百人一首絵であるが、時代とともにさまざまな変容がおこり、その変容のありかたによって、百人一首絵の系統がみえてきている。

それでは、本学の『百人一首 全』はどのような特徴を有するのであろうか。

本稿では紙幅の都合もあり、すべてについて詳細な検討をおこなうことは困難である。そこで、いくつかの事例をとりあげて、「素庵本」「像讚抄」を主とし、佐竹本三十六歌仙絵・光琳かるた・狩野探幽筆「新三十六歌仙画帖」（国立東京博物館蔵）の図様等も適宜参照しながら比較することで、本資料の特徴を探ってみたい。

天智天皇

本資料の天智天皇像は、纏縹縁の畳に垂縷束帯姿ですわり、御簾が胸のあたりまで巻き上げられている図様である。御簾をとおして顔がはっきり見える。顔はやや左向きである。

本資料では、天皇（天智天皇・持統天皇・光孝天皇）は、左頁に掲げたような図様で描かれる。他の資料で



天智天皇（祭魚洞文庫『百人一首 全』）

御簾が描かれるのは、狩野探幽画「百人一首画帖」（以下、「探幽本」）（東京国立博物館蔵）のみである。しかし、「探幽本」の図様は、鬘や衣冠の描かれ方が本資料とはまったく異なっている。むしろ、本資料は「素庵本」「光信本」に近い。もともと雰囲気が近いのは「光信本」で、とくに束帯の広がりかたは良く似ている。しかし、いずれの資料にも御簾は描かれず、本資料特有の意匠といえよう。なお、院（陽成院・三条院・順徳院・後鳥羽院）は纒縹縁の畳にすわるが、御簾は描かれない。

持統天皇

持統天皇像は、既述のとおり図様の変容が顕著である。本資料では、垂髮唐衣姿で纒縹縁の畳にすわり、几帳が配される。さらに、天智天皇と同様に御簾が胸のあたりまで巻き上げられた状態で描かれる。御簾越しの顔ははっきり描かれる（左頁参照）。持統天皇像で御簾が描かれるものに冷泉為恭画「聯珠百人一首」がある。御簾越しに姿が見える点では本資料に近いが、「聯珠百人一首」の像は唐様（髪上げ姿で団扇をもつ）で御簾は全体においているなど、全体の図様はまったく異なる。

「素庵本」「像讚抄」「光琳かるた」など江戸時代中期以降のかるたの持統天皇像は、すべて垂髮唐衣姿（裳は着けていない）で几帳を配している。なお、几帳は、歌仙絵では高貴な女性の象徴として用いられていると指摘がある。その他、吉海直人氏によれば、宝冠を着けた姿で描かれたものも明治時代には現われ、天皇の即位式をイメージしているのではないかとの指摘がある。また、任天堂かるたは『聯珠百人一首』の影響を感じさせる唐様姿で描かれている。このように持統天皇像は現代にいたるまで図様の変容が大きい事がうかがわれる。

以上からすると、本資料の持統天皇像は、衣裳や纒縹縁の畳に座る姿や几帳を配している点では「素庵本」



持統天皇（祭魚洞文庫『百人一首 全』）

以下の図様に近いが、御簾が途中まで巻き上がった状態で描かれている点に特異性が認められよう。

柿本人麿

人麿の図様については、先の島津忠夫氏のご指摘どおり、定型が存在する。すなわち、佐竹本三十六歌仙にみられる特有の図様（葵烏帽子に直衣姿、左向きで右ひざを立て、右手に筆左手に紙を持つ）が伝統的に継承されてきた。「素庵本」「像讀抄」「光信本」等も筆や紙は持たないが基本的には同図様が踏襲されている。本資料の人麿も筆や紙は持たないが、全体の図様は定型が踏襲されている。伝統的図様の継承が本資料にも認められることの一例である。

清少納言

本資料の清少納言像は、やや左向きながらも正面を向いた座像である。裳唐衣姿で右手に桧扇を開いて持ち、顔の下半分を隠している。しかし、顔は目鼻の部分ははっきりみえている。百人一首絵の清少納言は見返り美人姿または横向きに描かれることが多く、これは清少納言があまり美しくなかったためだともいわれている。真偽の程は不明である。「素庵本」「像讀抄」「光琳かるた」「任天堂かるた」等は見返り美人姿である。そうしたなかで、「探幽本」は、久下裕利氏の描写を借用すると、以下のようになる。「正面に座して顔を斜め右上にあげ、同じ方向に視線を投げかけ、それと対角線に交わる支点となるように右袖から開き持った檜扇が描かれている。その左右の袖口を前面に押し広げた上半身の姿態は、佐竹本中務図と酷似するものである。中務は百人一首に選ばれないゆえの転用とみるべきであろう」。本資料の図様は久下氏の描写とほぼ同じで、伝統的図様から逸脱した正面像として描かれる。佐竹本三十六歌仙絵や「探幽本」の系譜に連なるといえようか。

崇徳院

崇徳院像は問題のある図様として先行研究で繰り返し指摘されてきたものである。問題の中心は崇徳院を天皇として扱っているか否かという点である。吉海直人氏の整理にしたがつてまとめると、以下のとおりである。「素庵本」では天皇は纒綯縁の畳に座っているが、崇徳院だけは「畳なし」で座っている。「道勝法親王かるた」では臣下用の高麗縁の畳に座っている。「像讚抄」では纒綯縁の畳に座り、江戸中期以降現代にいたるまで纒綯縁が続いている。すなわち、畳の有無や種類から、崇徳院の扱いが時代とともに変化してきた様子が浮かびあがるのである。

本資料の崇徳院像は、垂纒束帯姿で高麗縁の畳に座る。御簾も付されていない。崇徳院は天皇や院とは明らかに異なる扱いで描かれていることが窺われる。

以上、五点の図様について、他資料との比較で検討してきた。その結果、人麿のように伝統的図様を継承しているものもあるが、他の四点のように異なる図様を有するものもあった。稿者の粗粗の調査（素庵本・像讚抄本・光琳かるたとの比較）によれば、本資料は、図様の左右の反転等も含めると全体としては約半数が伝統的図様の踏襲である。しかし、個々にみても、天皇には御簾が描かれる（御簾は途中まで巻き上げられている。顔は透けて見える。）こと、儀同三司母が立膝のように描かれることなど、他資料とは異なる特有の図様もみられる。すなわち、本資料の図様には伝統的図様の踏襲もみられるが、独自の図様のものもあり、種々の系統の図様が混在していることがうかがわれるのである。

おわりに

本資料には他にも問題とすべき図様がいくつか認められる。たとえば、「法性寺入道前関白太政大臣（忠通）」「入道前太政大臣（公経）」のように「入道」が冠せられた人物は法体で描かれていること（管見の限り他資料には見当たらない）、左京大夫道雅が衣冠束帯姿で描かれていること（他資料では武官姿）などである。先行研究で指摘されている祐子内親王家紀伊や式子内親王など女性の図様についても比較検討すべき例が多い。本稿ではとりあげられなかったが、個々の図様について「素庵本」「像讚抄」等との詳細な比較検討が求められよう。しかし、紙幅も尽きた。本稿では『百人一首 全』の概要紹介にとどめ、全体の検討については後稿を期すこととした。

注

注1 百人一首絵については、以下の先行研究を参照した。

- ・ 島津忠夫氏 「百人一首成立の背景―歌仙絵との関係をめぐる―」『国語国文』昭和三十七年十月
- ・ 島津忠夫氏訳注 『新版 百人一首』角川ソフィア文庫 昭和四十四年初版
- ・ 森暢氏 「百人一首絵について」『別冊太陽 百人一首』一九七二年十二月
- ・ 森暢氏 「百人一首絵」『国文学解釈と鑑賞』昭和五十八年一月
- ・ 「大阪市立中央図書館蔵 百人一首関係文献目録」大阪市立図書館 昭和五十一年三月
- ・ 西本周子氏 「美術史から見た百人一首」『別冊国文学 百人一首必携』『さ』 昭和五十七年二月 学燈社
- ・ 有吉 保氏 「百人一首絵入注釈本について―新出資料「三略抄」を中心に―」『国文学研究資料館調査報告』第九号 昭和六十三年

- ・ 跡見学園短期大学図書館編『百人一首展図録』平成二年九月
- ・ 井上宗雄氏村松友視氏『新潮古典文学アルバム11 百人一首』平成二年十二月 新潮社
- ・ 松村雄二氏『セミナー 原典で読む6 百人一首』国文学研究資料館編 平成七年 平凡社
- ・ 吉海直人氏『百人一首』とかるた絵』『国文学解釈と鑑賞』平成十年八月
- ・ 吉海直人氏『百人一首への招待』ちくま新書 平成十年十二月
- ・ 吉海直人氏『だれも知らなかった〈百人一首〉』平成二十年一月 春秋社
- ・ 久下裕利氏『探幽歌仙絵盗作事件』『学苑』第八一九号 平成二十一年一月
- 注2 流通経済大学所蔵『祭魚洞文庫目録』昭和四十八年二月一日 流通経済大学私家版
- 注3 高木征三氏『祭魚洞文庫について』『流通経済論集』vol.6 No.2 (一九七一年六月) p.129 (なお、この段階では、カード目録作成と分類ラベル貼付作業が終了しただけで、冊子目録はまだ作成されていない。)
- 注4 一九九〇年代初めに、国文学研究資料館による調査が実施された。
- 注5 佐野眞一氏『渋沢家三代』 文春新書 平成十年
- 注6 岩佐美代子氏『岩佐美代子の眼―古典はこんなにおもしろい―』平成二十二年 笠間書院
- 岩佐美代子氏『宮廷の春秋』(平成十年 岩波書店)にも、穂積家における大正昭和期の家庭における百人一首をはじめとする古典文学享受の様相が活写される。
- 注7 湯澤賢之助氏編『近世出版百人一首書目集成』(平成六年 新典社)、吉海直人氏編『百人一首研究ハンドブック』(平成八年 おうふう)などが刊行されている。
- 注8 吉海直人氏『百人一首』とかるた絵』『国文学解釈と鑑賞』平成十年八月
- 注9 森暢氏『百人一首絵』『国文学解釈と鑑賞』昭和五十八年一月
- 注10 藤田洋治氏『版本『絵入百人一首』の合刻作品―近世期女子教養書として―』『東京成徳短大人文教養研究22』一九九五年
- 注11 島津忠夫氏『百人一首成立の背景―歌仙絵との関係をめぐって―』『国語国文』昭和三十七年十月。以下、本項目の島津氏の指摘はすべて同論考による。
- 注12 吉海直人氏は、『だれも知らなかった〈百人一首〉』(平成二十年一月 春秋社)のなかで、「かるたの歌仙絵の中で、持続

天皇ほどさまざまな姿に描かれている人物は他にいません。」(二〇二頁)と指摘する。以下、本項目の吉海氏の指摘は同書による。

注13 岩坪健氏「源氏絵における几帳の役割について―国宝源氏物語絵巻と土佐派、版本」『平安文学の新研究―物語絵と古筆切を考える』新典社 平成十八年

注14 久下裕利氏 注1に同じ。

補記 本稿作成にあたり、百人一首について故井上宗雄氏と寺島恒世氏にご教示賜った。また、資料閲覧及び

祭魚洞文庫について流通経済大学図書館と本学図書館職員宮本二三子氏・石坂正男氏にお世話になった。記して深謝申し上げる。